

令和3年度 第4回記念館講座「川端龍子／横山大観に反して」

大田区立龍子記念館 学芸員 木村 拓也

■大観と龍子の略歴

横山大観 (1868-1958)

- 1868 (明治元) 年 水戸藩士の家の長男として生まれる (幼名・秀蔵、後に秀麿)
- 1889 (明治22) 年 東京美術学校に第1期生として入学。岡倉天心、橋本雅邦らに学ぶ
- 1898 (明治31) 年 岡倉天心が同校校長を辞任。助教授であった大観含め教員34名が辞職
天心は日本美術院を設立し、大観らもそれに追従する
- 1914 (大正3) 年 天心が死去した翌年、大観、下村観山らが中心となって日本美術院を再興
- 1937 (昭和12) 年 文化勲章が制定され、最初の受章者となる (9人が受章)
- 1958 (昭和33) 年 2月26日 89歳で逝去

川端龍子 (1885-1966)

- 1885 (明治18) 年 和歌山市に生まれる (本名: 昇太郎)
- 1913 (大正2) 年 洋画家を目指し渡米するも東洋美術の魅力に気づき、帰国後に日本画へ転向
- 1915 (大正4) 年 30歳の時、《狐の径》で再興第2回日本美術院展覧会に入選
- 1929 (昭和4) 年 院展脱退の翌年、美術団体・青龍社を設立、以降、亡くなるまで37年間指揮
- 1963 (昭和38) 年 文化勲章受章 (1959年) と喜寿を記念し、龍子記念館を設立
- 1966 (昭和41) 年 4月10日 80歳で逝去

1. 横山大観が日本画壇の巨匠となるまで

■岡倉天心に追従して

- ・大観が東京美術学校で学んでいるとき、岡倉覚三 (天心、1863-1913) が校長に就任
- ・卒業後、大観は1896 (明治29) 年に東京美術学校の助教授となる
↓しかし、
- ・1898 (明治31) 年 天心を中傷する怪文書が出回り、天心は東京美術学校を辞職
- ・それにともない、大観、橋本雅邦、下村観山、菱田春草らが同行を辞職
- ・天心を中心に同士とともに「日本美術院」を設立に参画する

■天心の遺志を継ぐ

- ・日本画の新しい試みとして没線描法による「朦朧体」の研究
- ・1906 (明治39) 年 日本美術院が茨城県・五浦に拠点を移すと自らも転居する
↓1913 (大正2) 年に天心が逝去
- ・1914 (大正3) 年 観山、木村武山、安田靉彦、今村紫紅、小杉未醒らと日本美術院を再興

2. 院展時代の川端龍子と横山大観 (大正期)

- 《狐の径》で再興第2回日本美術院展覧会 (院展) に初入選 1915 (大正4) 年
- ・画面いっぱい、曼珠沙華、穴からひょっこり狐の姿 → 琳派の影響と鮮やかな色彩の作品
- ・今村紫紅が高い評価をし、大観も強く後押し
- ・入選3年目にして、破竹の勢いで院展の同人に推挙される → 注目の若手となる

■院展での龍子の活躍ぶり

- ・「一に川端、二に龍子」 展覧会の季節はなにをするにも重用された →大観の絶大な信頼
- ・関東大震災の時、地震発生当初の冷静な対応が新聞で紹介されるほど注目の人物に
→《狐の径》は関東大震災のときに焼失してしまう

3. 大観との決別

■横山大観との決別

- ・震災以降、龍子作品は巨大化する傾向 →院展内で異色の存在に。組織内の軋轢に悩む
- ・1928（昭和3）年に自らは「鶏にかえされた家鴨の子」であったと院展を脱退
↓翌年、美術団体・青龍社を設立。第1回展は院展と同会場、同時期に開催
大観「君、嫌なことをしてくれるね」 この時以来、二人の交流は途絶える

■「大観氏の論議に反むく」（『アトリエ』1932年8月）

- ・「〈東京美術学校改革意見〉美術教育の根本精神を論じて」（『東京朝日新聞』1932年6月10-12日掲載）の大観の洋画への批判的意見に対し、「日本精神の上にはいわゆる日本画、いわゆる日本の洋画の区別は有るべきでは無い」と反論した

↓このエピソードからも二人の目指すべき方向の違いが浮き彫りになる

○大観は、世界に通じる日本画、国民絵画としての日本画を確かのものとしようとした
日本画壇の重鎮として、日本精神の追求は、大観の代名詞ともいえる富士の図に結実していく

○龍子は、新進気鋭の画家として「新しい日本画」

《龍巻》（1933年）、《源義経（ジンギスカン）》（1938年）といった巨大な画面に、時代性を反映させた作品で世間をあっと言わせる存在に

4. 大観との和解

■戦後、大観と龍子の再会 1950（昭和25）年

- ・龍子は尊敬の念をこめて大観の書を毎年正月に床の間にかけていた
- ・大観は曼珠沙華が咲くころになると、龍子の院展に入ってきたころを回想していた

↓

- ・第三者の仲介によって、大阪へと向かう特急列車の中で大観と再会
大観「曼珠沙華を見ると、いつも君を思い出していた」「まあ一杯飲もう」
→二人の時間がまた動き出す

■「雪月花」三巨匠展の開催 1952（昭和27）年

- ・大観、玉堂、龍子が雪月花のテーマを交代に毎年描き（1952～54年）、描き終わると松竹梅をテーマに同じく展覧会を開催（1955～57年）
→和解を果すも残された時間は長くはなく、1958（昭和33）年、大観が逝去する
追悼のため制作した作品は《逆説・生々流転》 →「家鴨の子」として反骨の姿勢を示す

○激動の時代をこえて見えてくる二人の画家の「絆」

- ・龍子記念館竣工時の祝賀会において（1962（昭和37）年6月）、横山大観夫人は「大観がここ
に出席していたら、どんなに喜んでくれたことでしょう」と挨拶し、龍子は涙を流す
→時にぶつかり合いながらも、2人の間には日本美術史に残されていくべき強い絆があった

今後の龍子記念館の予定

4月10日（日）まで 名作展「みなさんが選ぶ！龍子記念館コレクション（後期）」

4月23日（土）～7月3日（日） 名作展「新しかる上に 龍子の日本画へのまなざし」